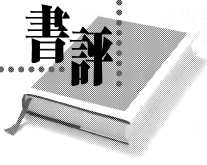


書評



熊野宏昭, 久保木富房 編, 貝谷久宣 編集協力

パニック障害ハンドブック

治療ガイドラインと診療の実際

笠井清登

パニック障害の正しい知識と治療指針の普及に向けて

パニック障害は、青天の霹靂のように生じるパニック発作で初発し、その自覚症状は動悸、息苦しさ、胸痛等の循環器・呼吸器症状が主体であるため、精神科や心療内科ではなく、内科や救急外来を初診する場合が圧倒的に多い。また、「パニック」は一般的な外来語として「精神的に取り乱す」といった意味で用いられているため、パニック障害の病態を一般の方はもちろん、医師ですら理解していないことがまれではない。しかし、パニック障害は、生涯有病率が一般人口の数パーセントと非常に頻度の高い疾患であり、すべての医療従事者に正しい知識と治療の指針を普及させることが必要である。このハンドブックは、そのような主旨から作成されたが、結論を先に申し上げると、大成功の書であり、その目的を達成するに違いない。

本書は、心療内科・精神科・臨床心理の第一人者が結集し、生物—心理—社会的な見地から非常にバランスよく記述されている。いわゆる EBM (evidence-based medicine) の羅列だけでは、実践知とならないこともあるが、本書はもう一つの“EBM” (expert/experience-based medicine) が随所にちりばめられており、その意味でも大変バランスよく、実践的である。私は編者・編集協力者の方々を個人的によく存じ上げているが、彼らは常に集い、議論し、最新情報に敏感であり、非常に科学的で実践的なバーチャル研究所を形成している。本書の内容に、信頼性・一貫性を感じるのはそのためであろう。

本書は構成にも優れている。プライマリケア従事者や、若手精神科・心療内科従事者の研修にとつての minimal requirement が、前半の第 1 章「A」と第 2 章にまとまっている。指導者にとっては、この内容でクルズス・講義を行えば完璧であろう。後半は、専門家が認知行動療法的アプローチを行うときの実践的ガイドラインとなっている。

臨床評価尺度類の充実も目を引く。臨床研究に取り組もうとしている人には大変便利であり、執筆者らが読者の側に立ち、労力を惜しまない姿勢に感銘を受ける。心理教育についてのスライドの提示も斬新な試みで、大変分かりやすい。可能なら、CD-ROM で付録にできれば、患者・家族の心理教育に、臨床場面で広く普及するだろう。薬物療法や妊娠時の留意点、研究成果の部分は、情報の更新が著しい分野であるので、頻回のアップデートを期待したい。

装丁も爽やかで、中も大変読みやすいデザインである。こうした意味でも、ハンドブックとして常に手元に置くのにふさわしい。このようなすばらしいハンドブックが、他の各種精神障害にも取り揃えられればと願う。多忙な業務の間を縫って、このような本当に役立つ本を作られ、それがわが国のパニック障害の診療を標準化し、レベルを向上させ、当事者の福祉につながる。こうした静かで誠実な社会貢献に心から敬意を表する。

(東京大学精神神経科教授)

●B5 168 頁 2008 定価 3,990 円(本体 3,800 円+税) 医学書院